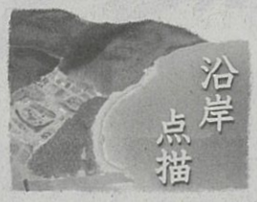
朝刊
2022年(R4)4月9日(土)
讀賣新聞
（第3種郵便物認可）

津波語る三つの碑

被災地から



4月

釜石・唐丹

東日本大震災から11年が過ぎた。県の沿岸には津波の記憶を伝える石碑が多く残されており、釜石市唐丹町の本郷地区では明治、昭和の大津波、そして東日本大震災の三つの記念碑が並んでいる。3月末には県が新たな津波想定を公表するなど今後も津波への備えが求められる中、改めて津波を語り継ぐこの場所を訪ねてみた。（宍戸将樹）

明治の大津波の記憶を伝える津波記念碑（右）。左には昭和三陸津波、東日本大震災の記念碑も立つ（釜石市唐丹町で）

三つの記念碑が立つのは、海沿いを走る県道の脇。中でも最も古いのが、高さ約2・4㍍、幅約1・6㍍の「海嘯遭難記念之碑」だ。1896年の明治三陸大津波の記念碑として1928年、住民らが建てた。「海の方で突然雷のような音がし、間もなく荒れ狂う大波が、高々と押しよせて来て800人の命を奪い、300の民家を破壊した」。碑の横の案内板には、当時の本郷地区の住民の大半が亡くなった被害の様子を生々しく伝えた碑文の内容が記されている。碑は2008年、昭和三陸津波（1933年）の記憶を伝える「昭和八年津浪記念碑」とともに現在の場所に移された。

明治・昭和・東日本 先人の言葉 伝える

11年前の津波で自宅が流された本郷町内会長の小池直太郎さん(75)は「碑に書かれていたような津波が再び起きるとは驚いた」と当時を振り返る。しかし、津波によって碑文の一部がはがれ、流失してしまった。碑が伝えた津波の恐ろしさを目の当たりにした小池さんは「津波を伝える碑を守り続け、継承していかなくてはいけない」と、市に修復を要望するなど碑の保存に奔走した。

修復作業は文化財の保存や修復を専門とする、国立民族学博物館（大阪府）の日高真吾教授が担い、20年4月から約1年間行われた。残った碑文には補強処理が施されたが、流失した部分はあえて修復せず、そのままにした。それが津波の威力を伝えることになると考えたからだ。

東日本大震災の翌年に建てられた「津波記憶石」には「つなみがきたらにげろ」などと地元の小中学生たちから募ったメッセージが刻まれている（釜石市唐丹町で）

日高教授は「碑は津波の記憶を伝える重要な資料だ」と指摘する。現在では写真や映像などで簡単に記録を残せるが、当時は津波の様子を記録する手段は少なく、碑が津波の被害を伝える重要な役割を果たした。「碑文が決して大げさに書かれた文ではないことを震災の津波からも実感させられた」と語る。

修復の過程では実物大の碑のレプリカも作られた。レプリカは昨年11月、釜石市郷土資料館に寄贈。同館では現在、企画展「津波記念碑」を開催中だ。同展ではレプリカとともに市内にある80以上の津波記念碑についても紹介しており、同館館長補佐の佐々木寿さん(61)は「いつの時代の碑にも『津波を忘れないでほしい』という先人たちの思いが込められている」と話す。

三つの記念碑のうち最も新しい東日本大震災の「津波記憶石」は震災翌年に建てられた。「つなみがきたらにげろ」「じしんが来たらすぐ高いところへ」。地震を体験した子どもたちのメッセージが彫られており、小池さんは「明治、昭和の記念碑とともに、後世に津波の記憶を語り継いでほしい」と話す。明治、昭和、そして平成――。それぞれの時代の人が碑に込めた思いが実を結び、次に来る災害で一人でも多くの人の命が助かってほしいと願わずにはいられなかった。

ウクライナ4人 受け入れ

ことが確認され2006年に一時帰国。63年ぶりに家族に再会した。

岡本正善町長は「悲惨な

花見かき列車 旬の味覚堪能

が旬の味覚を堪能した。

宮古湾で養殖された花見かきは身が60㌘前後で、普通のカキの2～3倍の大き